彰著閣集

貳

一三二

新著聞集

酬恩篇第三

犬嶮難を救ふ

蛇密符を傳ふ

活鼠金を奉す

猫舌を噉斃す

鶏を活して賞ふ値ふ

犬嶮難を救ふ

寛文三年ふ駿府乃在番ふ酒井伊豫守殿を
せし小屋り白犬ありしが常ふ豫州殿乃
前り出をを小坊主ふ与てものを喰せるをり
ける所豫州殿遠回りをやうめしいふをを
まふ小坊主も供ふ犬いりしを過て谷り落
たりしよいりくり素りしゆん件乃白犬走
り帯乃むをびめを噛へ曳て岡をを行ぎて
吠ゆしむ者ども驚き引ぎて助けてぐり

蛇密符を傳ふ

上杉彈正大弼殿乃家ニ靜田彦兵衛と云ふ人
ありし先祖ゐる時他ゆ童のゐまりて
白蛇と敵けんとせしを求めて
放てやりぬをれ悔りし潔ふく夫婦娘と誘ひ
ゆくを免ゐるはかて出むひ今日ハきるけふ
ゆる此子ゐ命を助ゆ為ゐ迎ゐ
ゆせしを家ゐ帰ゆきコハ如ひすずゐ小
へたゐひゆん金ゐ与ゐ代ゐ白蛇を
助ゆるゆへるをれゆん此子ゐ帰ゆき此悦ひ
ふハ蛇乃見入ゐる障を除くゆ敬へ奉ん此呪文
とゆり伝ゐ入てゆゆをせゆ立不験ゐべし
一子相傳ふゆをよて別ふりゆをれゆ金に
家ゐ代ゐられゐ女乃子をゆ人々ハ件乃
符をひ伝ゐいれゐゆを代ゐゐれ

活鼠金を奉す

寛文六年乃ゆにゐりしお江戸新吉町にあ
香具屋九郎左衛門宅ゐ鼠ゐまりふ溢ゐれ

桝落して乞家来ふ敷せよといひたるしを不便
乃ものにおりひ助命放ちしをのあ乃夢ふ児一人
来り言ハ命たゞ乃糸こそ西ちきこし
めしをとす先金魚とさうれふ出しあると義
食とおりひ目ちあてちふんにふ物乃ちうしを
吐出しられく金子一歩ちりあるとハ寄物乃ちの
ちりてそれちりめち寄宅ハ嵐を敷さ
げりし

猫舌を噉鑿す

大坂博労の内葉山町鍛冶屋八左衛ゞ妻ゞきりに
ひづひく成すべき猫ちづきし比久しを飼
たきし猫床乃ちをを離ずちりしゆ毒人の日
猫ハ頓て成するちりちるきにてハ汝を可愛ゞ
乃人をたゞじいゞくへちりともゞけよを口説しゞバ
打ちはきて好さりに丹ちりしゞ毒人をちく成
て壁おりに件乃猫虎乃跡ちつき一町ちり
りしを追反しをれゞ書に内り舌をそい切て
成したりし貞享二年十月廿八日乃ちるを伝りし

鶏をいとして賞ふあり

相馬出羽守殿家中富田作兵衛在江戸ふて二階
小住せしに何る事ハ夜毎に怪夢ヲ
見美女一人来りて只今我ハ殺されし海法助事下
さめへ何まとハまくはれ申ん共いとと
行りへハ夢覚ぬ頓て起二階とおりてこれを傍輩
何もる寄合鶏乃かしら雌と雄と云と合りし
このバ扨ハ夢乃告うれ也とおりし夢ヲ
こんなりし此鳥扨ハ賜れと強ちに受日比谷

乃神明に放ちあるべ殿乃御母公きこしめ
さしきるのあり其作左衛小樽者と賜りし
ものちかるるまに乃ふもちきく二百五
十石新恩と拝領せしハ寛文年中乃ものり

新著聞集

報仇篇第四

猿恨怪をなす

報書の僧子となりて家となりなす

怨念たちまち巫女に附て報を害す

驗士を報して後刑戮せらる

僧財を掠奪て一族悉く滅す

甥を報して網を焼く

非理なる奴を報して二子狂病す

馬を詐て狂死す

奴婢を禁獄し絶水變て命を奪ふ

馬乃筋骨を傷て神前乃血を見る

大絶を報害して後同日乃死す

羊を奪ひ股を截七代足を病

虎皮牛を纏ひ牛れ鳴をなして死す

鼠指をくひ痛む

猿恨怪をなす

御笛殿北山大原乃知行取ふて鉄砲を持大猿

乃乃ふしを拾ひ猿れのれを腹を教て

を合せふしを打敷されの日乃ひひ

ひきて都ふ俗乃常に来しる醫

師乃ふ〳〵頓て脉をうせへばさきを

ゑの病乃ハかゝ鏤を用ひ〳〵立取乃

験ひうんはくハを求めふ取へ大原の

庄屋来しうバ沙汰方ふ鏤を取てはしせよ

を使とせらるゝ庄屋がいとゝ幸ひ人よなのまん
て鍍とともに来りん急ちるものこゝいくえられを奉
しとて和しりうと頓て醫師ハ教ゝ海ふ
調て治いゝせりくるよ漿甚盛ふるゝ譫言を云
たをるしうられて追こ醫師乃許ふ人をちり
りくるよ漸く醫師もを来しうる鍍を海いるせてう
くてたすれく語る醫師ばどろき某ハ此ろ
江州ふ麗り只ふ海りし不ゝ使ふ及を
承りてまりゝ言ふ名こをせン不思議乃ちう

いるよも故りるへしそ大原ゝ人ゝりて問せ
ちりく庄屋此るハ京都ゝ出ふたるふ是
ゝるすとりずそて擶笛殿乃連枝ふりり
りる若王子僧正六角乃正伝院僧正と相共
壇を荘りていのるせふよ壇乃上よ大猿一ツ
りりりと僧正頃ゝ引組壇ゝ下よおろひ
ちち猿とちへんくせりりよ猿ハ逃て門外ふて
りゝ立ゝ廻しるバ俵ふも抜ハ此いのり叶ひ
て壇とやりれ付ふ寿者息ゝりゝや

殺害人僧子とちがひて家をかろぶす

江戸にて行る家中の器物を初めとして
八十余日六十余年博奕に誘われ夜も寝ては
妻娘ちりぢりに出て作法なきもの成しば
親ハ切腹子二人ハ千住小塚原首を刎られ親切
腹の附撿使ふむらひたりに待ち合へ十五ときに
なりて親若ひの乃ろろ行る商ひ聖と日来云なる
ものにて金子沢山ありしかば紙部屋ふ
来り泊りしが行る附金なる三百両餘にて御来り今度ハ

供なくて自京へ上るとて此のあも同じ床に
寝られしが行くくとなりしハ此人を殺し
金をとりなりふまくに行るハ快よるんと悪
念なりしを出家といひ親しき友といひ士の似
合なるものいでるべきとあを以て寐れ更ふ
寝かくて終に暁方に刺殺し死骸をとく
隠し件の金を持ふ出ること不足なりしば
後にハいとじくもとりしるすも作し
ものち妻をむかへて八十郎産れやいるる産屋

乃内ニ嬰て又ふかく聖ニすがしも違ひぬ
ものゝ不思議なる聖乃腰下ハほくろなりし是
ハなきかゝれたるなり叔ハ聖乃ひゞ子
小産れるよりて恐しくなりしのいかりし
長くもぬ今かゝる憂目ニあひ武士乃ゝ
ひるる終をとりしす是全く八幡神が科とぞ
吾積悪今さゝ由穀ひ来れりさを載悔し後
生を助る便りもなしと恥ともを顧ずして
ものせしなり乃一返乃回向なむきさせ

きゐへりき音ハ是を乃ふきるへかるゝ邪
ものしるしなる今わまてせて切腹せし
ものなり

怨念忽ち巫女ニ附て敵を害す

ゆゝ法華乃水乃山口法文乃家来を非道ハ
殺まゝ霊魂を人ニ附ぬるゆゝ口をしま
しハ神子を招きよるを立ても祈るけるり
祈念取ニ拔刃を立ものきゝ甚刀をかゝるる
法文乃を只一討ニ切殺しなる則神子

評定所へ引出し穿議仕候へ共あらぬ神子
の日〳〵更よりあらぬ侍ず我女の身みく何た
遺恨もなきてはやめさんやと云いしか
はもはなべきなると必定あらぬ神子ハ
難をのがれてあるま

験士を叡して後刑戮せらるゝ

京八幡乃橋本に麹屋なりと者を定宮ふ
しある山伏はるは来てはしハ久しく来り
しはもはのなるもちりしを今度乃なる

祈禱をたのまれ布施に銀子二枚ゝ申し其祝ひ
酒はいとせんをはりはれハ孫重乃なる
物もはなんとて者をまぐひて呑申
山ぶし酔はて寝るを不と斬殺して申ぬ
京にもをさせはる娘来り居て此はなをて
親ちゝもおそろきするあるとちり居る
ゞ頓て乱心して口ゝ情や纔乃金ふ拭
を殺す此恨少ハ見えん汝安穏にハたく
はきでは口惜や旬り嗚ぶ程ゝ親乃

首に縄を付べきよしにて出ましも剃髪し川
に流しける妻おいなく娘ゞ布子ハ剥て流し
あるかゝいをもよく云ひうとと違うよ流し双髏
と追ふ事裸にして中りるまかくいうる大勢人
ゆへ追つる盗乃宮をせし科ゆゑ礫に掛ル
ハ乃ハ何ゝ切ひ人事ふやゞん乃悪業
を載悔して帰

僧賊と掠奪ひ一族悉く滅す

奥州菊田郡下河村乃住人ハ
とも仏ましゝ中平四郎と云ゝと羽黒權現
乃社領長明寺へ参て隔意なくし中
なるとが寺乃金をとるを板平四郎ハ云含てハ船と
盗まセ持ハかくもなて経て金を返
とかし云ハれハ疾病しうといふほどふ遂て
公変なるぬ守護の内藤帯刀殿の前て
対変なるの時證文出セかゝ宣ひられも
元来ハ又なりきが出家乃僧合ばるものすて
負ふなる者へ帰なる八幡乃祠なる七郎等

乃いとく此神前にて誓詞を書灰になし酒に
呑んとつかまつれば地ちの毛よだちあれいなこと
なくして神水にて呑ぬれば里乃けしの
十王堂へ立よる長明寺向嵜二枚うちなき堂内
に投入れ偽りなき冥途乃證拠にさらへと
誓い申へ偽り口しやゆ我ハ損としなぐら引護
乃おこりて面目とうしなさ乃上ハ活て人に
面をむくべきこと成して恨をなすべしとて
断食して空しくなりぬるよ恵たちハ法者

家にて祖経て後成す早魃月日厚てか乃信め
三十三回忌すぎて子恵たちなきけ附ふの
長明寺笠ぶり杖をつき来るとして身を宿
りておそれ口なくく経に長明寺當住を招きて
祈念祈願なる又神子ハ殺ひけせなるう
振ミ乃すを口でしに不思立なる長明寺乃
おこり走りより汝ハ乃者ハ我崇をなし処
へ弟子の身にして祈禱ハ何をもて真乃ハ此家
にハ来るへかなび師恩を口をれ汝を先なる

報さん疾てもこの一族さくく滅さんとはかりし
ぐ富貴てるして後蟹乃足をもぐすにるる
ひしぎるハ一入嘆も添かんくをかなしみ今まハ
許しの兄弟てるる過ぎうり数さん平四郎ハあがる
盗し科ていれぐそれてる思慮もちてくん古てう
ひしれ好身ゆへ不便てなふ也けまそも科を
許すのなりがてられぐ病身てるしおくへしと
甚嘆り旬ん おそてるしさふ長明寺ハ所をやめて
外迯ゆを俗てう他ていきて去しあるを想たう

長右衛門ハ吾衛忠五郎兄弟四人同し枕て
去しぬたるが後家子ともかもも皆追こに炎ぬ
惠日寺乃圓智ハ真言宗乃名匠なれぐたのて
七日乃護摩を修てて六日ニのる日檀那
去しるるて夜かあて日数と合て成就て
てるかの霊平四郎てる付て八くく我崇をなす
取て圓智来て礙をなするよくハ乃法師
頓て憂目て逢さんく旬聚て惠日寺て
新しき卒都婆立てしをその梵字何者やん

削り捨てゝ四智こゝ山を立てかゝ仮粮籍ハ俗人乃
すべきまに所領を不与山法乃御法家乃僧
ものの所為なるべしとて使をとゝなることハ以の
外乃こゝ矢なり搦手をこゞとゝ寺濃へ訴へなを
寺社乃ものハ私ゝなりかゝとゝ仏乃御定取
わゝ對決せゝきしかも円智不届ゝゝなりて
追放せゝりゝと四智ハいゝゝ寺濃乃御法家なる
まゝに異賀れゝりゝ秘負ゝとゝ大ゝ憤り
紀乃駒丞ゝ隠き螺乃法師共の外大勢を

乃内史帯刀殿と調伏しゝなりの訴人有て
ゝめゝき穿鑿乃上いゝゝ餘人ハ許され円智と
螺坊主ゝなりゝ濃ゝ下さまに亀首せゝられ
なりゝと後ゝ行い合せハ皆なれ長明寺お
金毫乃いす取なる惣ゝ一人お邪道ゝ人
くハ災難乃人なりゝなるとたれけるハ
なゝゝ

螺と叡ゝて細を焼く

相刑本目浦ゝ大工八郎左衛ゝいふこの螺ゝ

悪人ゆへくりてゆけうひしゝゞ終てゆかめて満
了ぬめ殺しゝるハ延宝七年乃夏のすゑし
頃乃夏妻男を産取揚てこれを額に角
ゆう赤乃蓋らいちがひ其面ゞゆ蜘に似ゆし
とちてゆしらて細ユ乃道具箱を上ゆ置て壓
殺しゝるゆ且ハむゆゝし持上しゆゆ夫
と神子れ梓にゆゝて少ゆゆ紙を海ゆ流
悔めくて子と産ま仇となんとせしゆゞ海
殺されぬれゝ力なしゝ乃上ハ火難ゆ逢す

とゆゝゞゆのゆちゆゆゆ庫のゆゝと一所ゆ細く
干切きしに水ゆ糸ゞ細のく俵ゆ燃ゆゆて
ゆゝ乃仕しとゆ

非理ゆ奴と殺しゝ二子狂病す

尾州袁山掃部しゝゆ人毎年家来と何ゆ
成敗ゆゆゆるくゆゆの数をゆゝ掃部二人乃子
ゆゆ兄と甚之助弟と馬之助しゝゆゝゆ乱心
しゝゆゆゆの談ゆ何ハ獨言に祢ハ何ゆゆ何
ゆ何ゆ何義ゆて仇ゝ祢いゝゞの科ゆて

侍りて命乃義は助あるべきとは
ぶ屋きてハ又眼をいとかしく悪き奴なる物を
ぼきりて云うや何条かのれを助んと云て
い方と立て柱りて頭をうちつきくらく
屋ちり絶死しきるとかのまにすてかるハ又
ちとかりて四まにちり死人を埋ひ奈
ち兄弟ちもちり回しかりしとちし

馬と詐て狂死す

松平阿波守殿馬とやめさちんとて飼とちやく

ちりちりしてちりかし飼はをもも苦しかりしと
はちいまち飼侍ちずとやちりしうハ此馬と
責ちをふ伝ちちもちの馬ワづかて終ふ死ちう
ちのち馬屋乃者狂氣ていりちうハ殿乃
ちをちちも飼とやびハ乗じとて待しち
おのを詐りし中へかく病づき死ちしぐさの恨
伺ちしちて云て法わちり狂ひ死ちう
奴婢と禁獄しち蛇小變して命と奪ふ
江戸久寿町ち紺屋佐太郎とちう者乃ち或夜

なす人を逢家内乃穿鑿いとしかりしかし下女が
密夫を丸夜来りしをとるべく奉行取ふ訴へしこの
ど問出ずかくる此男ハ佐久間町三丁目金吾衛と
いふものの忠義なる人此ものハ佐あるものする者
乃ハ侍ばかくやたく頭ぬ件乃女乃ミ
拷問ずかくなる侍ものき責ふびくず重り煩ひ
ーとる人ず看病ずくしい宣ひしかと佐ち
ご妻以乃ずなる嗔詈盗人ず負とハいるの也
必ちハ必詫くず合ずしず終ず籠ふし

たずしを必骸をとるをおくべしやく侍るまじかで
猶もなおるのいなくしして耳にも聞ぬ人ざりし
ごハ囚獄司より寺ず送りしなれ此佐太郎ご
妻いくいずしご夜を行灯乃ず人ず吨嚇まし
ずれ時ハ殊ずなるずず吨を殺して捨
ずも又次乃夜ハ来ず居るずすべきるなく
ずて扱しご終ず身侍るず必骸を沐浴
ずをずず首ず吨乃侍ずしと支ずる
ず身乃毛竪て憂ずずし家を出発心

修行のあとをとゝめて神前より血をとる

馬乃筋骨をとゝめて神前より血をとる

武蔵乃八王子千人衆頭原半左衛門殿はゝ

馬乃尾筋前すゝをとり焼鉄を當るゝを好まれ

ゝる年乃元日ゝ子息權十郎氏神へ社参せん

やとて鳥居乃おまへにおゝる汚乃馬の血や

ゝい何とゝいふを神前まで漫こゝゝ参詣ハ

ゝ

ゝ供乃侍もいゝるゝ宜ゝや血無曾て

ゝ侍ゝずゝゝも自ゝ目にハ皆血にて踏所

ゝ鳥居乃あにてめづきゆゝをゝゝ煩

ひつき馬乃いゝくく真似をゝ七日ゝはゝ日

ゝにゝて云く急念や親乃よゝぬゝをゝて

馬をゝあたまゝ罪障ゝきゝ殺し畜生道に

墮ゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝ後悔ゝゝゝ甚夜

ゝくゝゝゝゝ

大蛇を截害して後日日に刻す

藤堂和泉寺殿内若原伊豫ゝゝゝ乃家来甚平

ゝゝゝの伊勢乃賀間と舟にて通ゝ岩ゝ當

るくなりしかして影しくひびきて大蛇動き出す
甚平すこしも騒ぐ刀をぬき大蛇の頭を討おとし
其長十三間ばかりしかるあハ跡より祟をなすと
故實ばかりして胴を三ツきり首一所
葬て吊ひ十三年めの同月同日同刻
水とのむして咽て死ぬ乃怪きまの
ばかりにやばかりて蛇乃ゆへなるべしと人く
ましはへるとき
米を奪ひ股をきり七代足を病

関ヶ原陣ニ三馬才三郎と云人山伏乃系裏と
もちて酒をもとめ山伏乃右の
高股をとりて米を奪ひ山伏
大ニ嘆て七代ハ恨をなすとあきらかなり
をそ上ら才三郎右乃方投足おそり隱居
して家督をゆるせど足なをりて家督乃子又
投足ニなる今みいりて同
殿家老ちんや代
牧野駿河守
虎皮牛を用ひ牛乃鳴をかして死す

江戸尾張町一町目の扇子や牛乃子をもやめ
面より足まで虎乃皮にてぬひふくを堺町乃
芝居より出し大分乃わるひとをもし松を
鳴せ〻そこ口をぬしあめしけへ食地を断
し六七日過れ〻成をとるく五六匹に
成りなの此なかの者ばかりして悩し
後ハひくすくに牛乃嘴海苔をして
成しとちん

巣指を噉しくこし

江戸岩川傳通院より利発くして取化乃う此僧
若年の時ゆる日れ申乃刻ごろ巣ごろ
へんとて追廻ハ右乃手にて握殺ちきしに
巣頭をつかしく指をくひて成り當に
すこし痛しかど早速ちろくゆり待しお
なのくち日ごろ勉ちゝ比ハ件乃指ふくく
ゆしいとて一生お忘回しまりかの災厄いの
きる最期乃一念にや海苔ゝ怖しさ毒
んちくとなれり語きし

新著聞集

崇行篇第五

歌女少女うげつ　松雪と号す

了然禪尼面を焼て法とをむ

禪尼面を焼き詠歌法を承く

洛陽高響上人

音響上人うげつ　火車に乗る

壯女法をき頓て安養を慕

寅歳和尚金を捐經を修

善貞法師榮を嫌ひ乞食す

幡隨和尚耶宗を教化す

乞食自害して歌をのこす

靈合山閑唱阿闍梨

頌西身を責香炬了佛を現ず

三海上人雩を祈て雷を鎮す

父誦經娘咏歌

武支姓を重んず

起讃松を植呪鳴蛙喧

安藝以八和尚

伊豆郎徃法師

山崎宗鑑

戯僧遺書

木村長門守最期雪操

不破萬作戀情

歌才少女うばが松雪と号す

伊勢乃國何氏の娘にして犬といへる者にして本性やさしくして和歌を好めり後乃朝の憲といへる題して

さゝ〳〵のうきまに露のゆびてゝいまさいつきるゆふ雲

十三歳の齢ひ元禄十年正月ふる雪降るをりるがいわく後世乃いとなむこと悟てゐる僧を招き我亡名を松雪と賜はれけりしに此松の雪といへる題ふて歌

よそ人はうるとて

ちぐ浪や志賀の浦松いかゝよりも今一しほの雪ぞ深の

死出路の糧了十念を授け得させ給へと念仏

念仏し

もろもろに朽ちぬべき朽ちぬべきものを読ておりしとかり紅へて後世の娘めかの艶まれ

ひろしまいりする便りてら大内りてきてしめされ

ぬるれ詠れ中に五首ちあさせるるとうや餘の首

いそもしに松の雪とい人を題を案しりひて死

ちる人のあとびまれるひとと人と云ひ人

了然禅尼面を焼て法を求む

了然禅尼ハ都乃人にて大内に仕へ侍しが婚姻乃

ち人の媒しをなす子三四人もうけなハ暇なれと

契約して嫁しぬ三十餘歳の内まで男女三人

設ちて支ちとを云ひはあふ髪をそる衣とあ

臨済黄檗乃諸禅林に入り参道隙なく務り天和

元年乃冬徧参のなりて仏に下り井上大和守

殿の屋しきにのりし白翁和尚に見へ法を受んか

乞しかわじ顔かたち美きてハ人口おそまこりと宣ヒ

しうバ頓て立飯り火攪を焼額より兩乃頬ふ至

るゆゑ焼爛し　和尚て参りしこのバそれ懇志を
ふく感し　大法のうるおく附受けうし詩歌て賦
して呈しまつり
昔遊宮裡焼蘭麝　今入禅林燎面皮
四序流行更無跡　不知誰是箇中移
いまるせうて捨てくるめやうもの絵の影心はうせ
爛れくる痴頓て愈てすもしも痕つけうしを亦
奇特のるもひとちきさ為合いかに自精舎
と建立し　一乗院と号し尼衆を集め法を説しとも

禅尼面を焼詠歌法を承
ひくし甲州鹽山の法身和尚して高僧の妹なり
禅尼れいくまつるす智人の超節操たぐひなう
しかく美麗のきくく有て世の誹避あがしと
師乃宣しるを学くひく鉄火を面に受て
和歌を詠して
我面恨てやくで鹽の山法士のたく火とやうん
かくて師のもふくもくへハ頓て奥義を傾あを
して授けたまひしまつる

洛陽高響上人

洛陽大雲院乃高響上人ハ説法の大導師にて世乃名高きなりしかれども幼き时より書を讀まゝて時の貴僧鉅儒達ても称嘆なりしかゝ浄土の奥儀をきわめるまゝのハ云も中也天台真言倶舎唯識の精きるまゝて捜求内外の群典洩さゝず猟渉しまゝひぬ三千余巻の时より偏に説法利生を業とし聲うるわしく辯美しくして一度法の席に列する輩ハ邪を摧き信を起さゞるハなし向阿上人の三部假名抄を演へらるゝ时ハ化人乃老婆向阿乃手かゝ書しまゝひもち往生至要訣やてゝ書き文を持ち来りセもうを後の源乃星乃菴を結ひ閑居しまゝひし时和州當麻寺乃曼荼羅ハ年千霜に及ひもきハいたゝゝ損壊して未の世乃結縁をゝ〻もるを憂悲しいたゝもしまゝて補ひ来りしを歳ゝて延宝五年五月人ゝを伴て當麻乃ゝ〻ぬ中古源乃頼

朝公の寄附ありし御厨子に蓮糸入大曼荼
羅を張て四百有余乃春秋を経ぬれし板を
剥して往古乃ごとく軸となり巻物ちんする工
を一向に叶ひかねて此ふし既に止みぬと
せしが寛相の上人帝を張深乃水を決ぎかも
草心を二に祈願ありしに一夜影出さるを
ありて翌朝自然に板と離れ巻下に一點も
疵なきを見いだし板及び表に張し帝ふ
本曼荼羅乃古くに変れ莊厳に成ぬ

はるかに後世ありがたきさまを兼て粗増に彩
具きれるを調へ揃へかの缺をを繕い
ん〳〵せしに何としても色合似ざりし是たるに
ありずと案じ煩ふ折名徒弟一両人二上ヶ岳に
おもむきて鋤を擔へる一人乃老夫ありけるを
語て曰古のころ大曼荼羅修復ける承しを
繪乃具なるものありいざ来せたまへと一群乃
森に導き是を熊野新宮鎮坐しありし
御私るとてそれしるし方を知て彩り乃

塊を獲はせ給ふるに礼謝をおん
と走使を召しに今まで尋ねふりしが何地へ行き
はりしかはあるべきはずしと餘り不思議乃ものて
ありしかて村里のそもくの人々問求しかど
老人ハ曾てたるものかしと云しはまハ
熊野權現ハ吉の曼荼羅を本地として毎日吉の
ひかり来臨したまふて傳へきりどうまを
權現の助力せらるたるふるいて尊かりし
の補の似ばりし色いもしあるまにてハるきやを

件乃塊をなてくとくとくと少しも違ハはりし前ウ
画師巧乃叶ハはりしハ吉の奇特を施しし
たまふ御ふるるるるんと絵おのかとひく
同年寛十二月廿日修復ふるくく成就し
文亀年中の覚円比丘尼の願主として後柏原院
乃震翰ふるはりし新曼荼羅乃再修ハ同年十月
十五日ふるの初て次乃午の年二月十日ふるの年
又ふるる一丈五尺の太寛相をふりし末代乃
副宝ふるて宰階ふりしるを重新曼荼羅と

やしきなるよかるる慶相ハ銘文古例乃ゆるもて
いくもかくしうきく當今乃帝の治ゆ自筆深ゆせ
たまふるまた上人さのよしを朝廷う訴へ奏
うるかくも勅許まして震翰の銘文版
下されみもやさも貴かりき賢聖乃墨に古慶
相及ひ件ゆ新圖兩幅かゆはいくを玉の治冠傾
さもるひぬ近衛乃左大臣をしめして諸寮
百官なの〳〵拜せるるとる天和のをしお
洛重山科乃郷う空也上人乃旧蹟竹蔭茂

荊乱を埋うたるもるき様をて本朝第
二乃導師とひはうハ東山西光寺におて入滅
すゆ廿一代集乃中の拾遺集うゆしかること
まてゆ久しくゆるまくてぬるるよわ哀う痛て
衆縁をはるる再ひ念佛清浄ゆ道場を建立
るひぬゆ空也上人の石碑門境の所ゆ立
かくて移んとせしよ郷乃老若ゆ〳〵みたの治
石塔ハむかうる近付しるの崇せるひく
発熱瘧病狂乱せるたひくるをハ一人もいく

ヤ寸者ハ多へかゝすといるゝきれど頓て上人念佛
三昧の密室ニ入もゝせ空也上人の法をしたた
まゝ入々おのゝれ云しるゝ中ゝ
そ安すゝ拙ゝ若も宗おゝん何ハ終力かゝへ救ひ
ひゝんとゝ乞しゝバ群居土民ハ貴きゝるゝさて
多ゝ集ゝ集ゝれど大サ一尺餘の唐壺ゝと地境の宣
ゝ彩ゝたゝいぬ一人も痛しきゝるゝてハゝし
壺れ内ゝ舍利のゝ入ゝきゝゝゝゝ天下大き
ゝ飢饉ゝゝれど都ハ人多きゝゝゝ

ゝ油とひゝゝて求めゝゝゝ塊を枕としゝ
餓死するゝの二万余人ゝ及ひゝゝかゝ
世乃ゝゝゝゝと上人多ゝ集ゝ
大雲院ゝゝゝゝ天和二年四月ゝゝ諸人れ
すゝめ四千四百四十非人ひゝゝゝ鳥目十二銭つく
施ゝゝゝ日ゝゝれ人數積ゝて二十六万六千
二千四人ゝゝゝ世人ゝ志乃堪ゝゝて感
金ゝ多ゝ十ゝハゝゝゝゝ百兩乃金を白紙
ゝゝゝて施入ゝ貞享三年ゝ齢五十八歳

みてくはるるぬ為て寢ぬき来迎ず瑞
相をゆるひ三身の數返ず称名斬くてこ
かしまして西てむひし安坐し大往生をとゐる
ひぬ

音響上人自乘火車

増上寺第三世音響上人ハ智道兼備ず高僧にて
世擧て崇敬しまつる所大衆をひいめ告て曰
我今日遷化するゆ疑ゆのゆ皆速て知て
受をえしと則ち法問を宣ひ已ふ附ゐ

看々天地清濁ず五欲境界淨利の臺三惡
火坑阿鼻の底一機不轉古今の事こいへる頃と
言して筆をとりぜて山門て出ゐ入ると大衆
不審ておひして送てゆく火車ず炎の熾
然ゆるぐ雲の中てゆ来る上人をふりてる図
扇みく招きをそれ自ゆ移て又大衆て
向て火宅てハみも出ず山車ずもてゆ
我ゆいこして しゆ涼して西方ゑ飛去る自ゑ
壮女法をきゆ頃て安養をとゆ

京三条ゆくすゑ西へ入る町 桝屋弁蔵と申者なるが
元禄十年に東より上り天敖と云て芸州の宿し
あるよき法とし下女こうしき者を伴ひ仏参に
彼の後の世乃ちへき當途たりやと問せれば
女わらわ和日蓮宗ふかく五題目の唱しけるを
おもいのこるべく去ども迫き次乃夜天敖へ向
ひ昨夜俗家しるに胸ふさぎ夜も寝ずと也
今はも此の来るかぎりと楽しまるし
まる父母のいとせ乃ふ笑ひて暫くは

願はいとしく法めしかとも迫しかまハ
天敖いとはれて作まハ安養世界ハ弥陀如来の願
心より建立なして彼ふかの所をひきうけ
まる浄土也 汝の宗ふ旨を目て崇しるかまハ幸
吾宗の観経ふも為 法華大乗十二部 経首題名字
と法ひぬ南無阿弥陀と以て浄土ふまいんと作れ
まくうう 称ふ南へよと細ふ宣らまし
家ふ闇夜乃 燈しする今たりひるうと
歓喜乃涙油とたまぬ年二十七ふく今を書ふ

艶容にして心をやしなひて安養に
ぬいてんやといふこゝろなる大信者となりてそれを宮
にて天教へかたらしハ餘りはなはだかく
貴きものとなりぬるものかくんやとおもひ丹波
の国紀の姉なりし者にかくと告きたしいつ
くにかゆくへしらしとなり
寅歳和尚金をすて經を修
増上寺に寅歳和尚といふ人〻家文領として金子
三百兩人の物をもらとて和紙にかきて増上寺に

一經乃蟲に損しをとゝ裏うらし散雑して見
つゝかきをとしく補いたる延宝四年
同八年ふかまりて漸く願うちぬ同九年伊勢
に蓮華谷にこもる隱道せり和尚ハ
寅乃歳寅の月寅の日寅の時に生まれ
わらをもらう山名を付ふとなり
善貞法師ハ鎌倉光明寺の学侶なりしが後に
善貞法師榮をきゝひを食す
洛陽知恩院に寓屋せり勝れを妬む世

みなゝひなんくしいかにしきるなりても多かりしを憂
すなはち叡比山より寺賜はらんとはかりしかバ
かくらうき世ゝまき世に何らせんとやく名利を捨ん
すハたゞじとなりし定めて餘財をすてゝきくたく
金三両をもちて是ハ昔年より積たりて伊勢
太神宮へ奉納しけれより信州善光寺へ
ゆきしもりて乞食せらまこしを所の人に情なく
問しけりて齋なりし施しゝセ布施物を備れとも
何よ更に受ぬるもハさりし寄来りて施しゝされど
一度の用なりとてあしても外ハ乞食にもゝせられぬそれ
様いやしからぬ人なりとていまを惜みて菴をむすひゑて
せし同國松本よりも旧友の尋る僧来り訪ひ行く
見しも語りていろ〳〵もちし物を施しし人やまがくき
善知識なりてわかいかし我の人なりけりセハかく計り
世ハすてまし世の涙を拭て悦ハれしと延宝
年中のことにて侍りし

幡随和尚邪宗を教化す

九州吉利支丹の宗門蔓向して政庁の妨なる

ちからの甚しかりけれど将軍佛法を以て治せず
んいかゞ角きすると思召て増上寺の國師と
法角諍論して化をばしらの仕遂ちんハ諸宗の中に
幡隨てるるいろいろ方しして上使をもてはたのを
方しして和尚かゝく辞せられかゝも上使三度
てしかし若し悪黨退治したいくいるるも也
も望て角てへとをられど山上ハを非て
方しびけるい下向しかしふ假り堂を
作せるへしけるを則ち日向國てゆく

一宇を造立けるを今ハ白道寺とれ也ハをとら
方しふ不なをばして伽藍無数詣んとてすが
太神宮を祈る奉んと山田てゆふを求
来も尊神角てして立せしの下向ゆを祈勝
秘も力を添んとの告けしらハ特て貴くなりし甚
聖朝佛像を賣者来りいるを拜せたまふて
甚しをさいふも更てるをハ正しく尊神乃
ちゝ合せるふ驗しちんとて歡喜し頓て
請しるしる去程て如いくの人をとなるを

ばかりよ云ハず跡を慕て只こゝ迄よ祇園山ふみ入
ひとしくも方々尋ぬれども行衛しらず終に
帰りさうせハやとは白川の下り岩て正法を伝
濫邪法を作あ摧きたまひあれどかの邪徒等
改悔敬伏して浄土門に入者幾千万人しかる
とき尋ぬる中に辛崎人ハ正法を伝へられ
のまゝとして立ル捨身しあるとゝ和尚なし
此後弘通利益しかの霊像をハ白道寺に
本尊とたのゞ奉り又結縁へ起きこゝひて則ち

七日さりて法施したゝひ第七日命たゝ
るひとを隨侍乃大通法師火葬ふ
骨ハすこしもなくて平生不ふの念珠焼爛して
かゝやかる舎利しるして法ぎるに火中より
出ぬれ此を以へきまて今幡隨院乃
重寶にてそなへる

乞食自害して歌をよむ

寛文十二年四月上旬ノ洛東三條橋の下に廿歳
ばかりの乞食の女自害して出ぬ

一首

[illegible]

[illegible]

天上[illegible]ふまて及ひく有る貴きに[illegible]和[illegible]

けりせしかして

[illegible]ふ長し姫[illegible]

又

[illegible]

けりた和尊[illegible]

霊合山閑唱阿闍梨

閑唱阿闍梨ハ信州綿内村の人也母懐胎れとき

魚肉五辛れ[illegible]と食しかとハ何とかく胸[illegible]て

吐ぬ児生まれてもて母肉[illegible]と食して乳と喫れハ

曽て飲ばりまバ[illegible]直人[illegible]

[illegible]き四歳れ[illegible]父月代[illegible]

[illegible]ハ[illegible]三里[illegible]陳[illegible]村[illegible]

自ら童頭と剃り[illegible]父母も為方なくて[illegible]

年れ[illegible]同國の帰命山祖唱[illegible]書き上人の許ゟ

はをもりたるくと語りて剃髪し愛宕ぬ
をまもりて師に従ひて学問の如来寺に越て
多のをまを修しに師は上人はいとの遷化し
たまひて廿一歳にてをはりを思ひしるはをもて
繁卒は地を離れ名利の便を思ひもやうて
濃州美原村は真性寺にたもつをたてまつりて
千体の仏像と刻と又京堂の八幡院にも千体と
きはめ卒亡来ふく素来は問はを
州菴をしてし霊合山と名付多寺を
をもひ出持る一物もなくて寒風の吹も唯草
かるるの一衣をきて念仏一向ふ念仏
乃ましをもひき飯依の人と体更迦と上人の為
をて迫せうに物をもて一起も食し
をもひ模広者のなをすまれぐはを
まひまひ乃る時男女卒人つまり寄乃まり
聖霊のをををて出せまてもをれぐ大きなる桶
七荷まてれくをもひしとや上人は一切の苦悪の
境禅定乃中ふ又をなりしをもひりをふやはも

見げるまゝ川方へ宜しゆゑたゞひとりゝ遍國乃
ゝゝゝして當歳子の炙せるハ馬屋のかゝゝに
埋めとゝしるわるゆゑ上人村のそれ家かしこれ
家と行ゝ尋ねるゆゑ人おしもゝ遠ハばりしかの所とき
吳合山ゆ石塔を建んとて筆案村撫弁作たりとはひ
又海ゝ十餘町山の奥ゆ石をてきしつゆ
ゝ自ゝ人夫二百人もかゝるゝんぞ見るて
村の者と乃ゆ失て出ゝんゝ傾快しきれどゆ
堅石傾ゝ大雨して件の大石作たゝ家の前ゆ

川ゆ流ゝ来ゝ忠人と寄異のかゝひとゝし頓て石塔ゆ
おして有ゝ尾州乃烏頭勘四郎とゝ人ゝ妻子
霊合山て詣て貴きゝゝしゝ一日逗留せ
しゆ勘四郎ゝゝ念て閑唱とゝん野干ゝて
人の妻子を誑ゝかせしゝゝるゝと上人ゝ所利ゆ
女ゝひゝ汝ゝ夫某とゝゝゝ悪口しきゝ
ゝゝく飯きてゝのゝゝ女ゝて後乃ゝと泣きハ
勘四郎大きゝわゝゝき吳合山ゆ詣て懺悔し
ゝゝとゝゝ大信者ゝゝゝぬ三河國のゝゝ者念比ゆ

貧窶セしかど素一服を服でゆゑを主袖て
もゆり名号をとしひりまでと又ゆへゐ隆めの
ゆて踊をきしれくりもあ云町るて畠の眄
て立ゐ白ひきと堀妙の罪の報をきんく宣へハ
れを基ゐ地也と云しかく強ちあはゆて立人弁
れ下に炭骸れ髪ゆしひるゐゆしも損せ炭指櫛羊ハ
朽ゐるゐ仍しきをゐるをゆしゆ私すをしも名ハ
ゆゆゆて上人と家て伴ひ飯ゐて妻をゆゆゐる
ゆゆ仍ゆすをしも法ゆず懺悔せゆゆ猛ハ責

あきハ妻潤ゐしをひゆハ三十年をゆて京身
石体の女ゐ主乃仍ゆしひゆしゆは妬ゆ焔抑へ
ゆゐて立ゐ叡ゆの女ゐ堀ゐかゐせし
て地ゐ倒き悲しゐきを上人ゆゐのゆをて
いと細ゐの教化ゆ血脈と興へゐひゆはをて
仍ゐ奥方貴き夢を見て招きゐへハ上人いゐて
吊べき霊ハきゐて立ゐ不をゐをゐへば
小さき白骨れ知ゐゆ局者面して
ゆゐきゐゆゆと主人ゐめゐゐへバ上人秘ゐ

しそ郭屋よりはるゝ局法ちほを今ハ仏とこの
はるゝみはるゝん當若殿正紙生れ一産れ三子れハ
しきはるもと思ひ宣先ひそかと報しまて
まゝ堀をかくせしはるの大殿てしはるゝはんと
かきくきしうば上人神うはるもてて大殿
と教化しかの白骨と吊ひ侍しこ後十三歳
ゐしし若殿れはるてゐ少人まて神ハそれと兄弟
ゐしるかゝも今度開唱乃吊ともゐくしき
黄泉れ苦患とまるうれ侍しと告てまて

はるしを地又はるる人れるゐして中張て毎月に
開唱しふ聖はる寺れ隣ニれはるしはるすまゝ吊を
うをはるもをを告しこのバ頓て如来寺に侍を立て
掛結しはるゐりてちしはるまハはるゝ成少人てや
子縁はるじとゝハ先祖れ霊をゝまるもはゝ
をゝしまふてはるを真ををくして三宝と恭敬
しりれどやて妻臍胎しぬ二男やくはるを上
人をかをしてはる仏児の名孫ををとゝゐりしご
をををて男るをとうをはるしはるゐ如来寺にて

勸化の席とりきたりまへい意味半物市をなせし
中ゝ家ぐるみ七歳なるめ兄ゝ家ゝきを
ゑて立馬はうふしやあ姿うん藤が泥ふ
馬市が血ゝ塗ゝ罵ると上人ゝ涙ひく
ぬるし人ゝ上ひ姿ゝ先祖討死せしまゝ
とりせ涙ゝ自ゝ祖父大坂陣に討死せし
と取ゝ結ゝとゝ頃て血脈をゑゝ
人ゝ人の娘十六家ゝて唖ゝ上人ゝ名号
血脈をゝて香華酒水をゝ營ゝ霊魂

前十一日ゝ安養ゝ聖衆ゝ數ゝ
て貴ゝ念仏ゝてをゝ

安藝以八和尚

藝州高光明院の開山以八和尚ハ奥州磐城乃
人ゝ母子ゝ憂て辯財天女ゝ
祈誓ゝ掬ゝ頭ゝ載き足を翹て
月影をゝ岩ゝ端をゝ誕生
ゝ法ゝ知家ゝ涙ゝ
加藤式部太捕ゝ不信人ゝ

いぶかしく思ひて試んとて招請なりて齊を設けて
家主と共に相伴ひしに其食をすゝめ
奠鳥を料理し齧色なる女子の如く只骨なる
羅を去て給仕なりしが地の隙より飛ぶ
なりて和尚自若として眼を閉じ
料理せる奠鳥はたちまちに飛躍して給仕せる女
子は看々髑髏なりぬ左衛殿大ひに驚き
わなゝき即坐に改悔歎心し多へ入るなれ
ばなり和尚教化念比なりしゆえ

此くしあれば其夜より件の病人ふしぎ門外へ
出るのみならずぬ相州の百姓勸化に服し至
誠にて先靈を祭りしに其比旱魃して近四
乃田畠にさくく和色つきしかぐれの雨こは
ずしもたりかなりし又甚隣の児夜にに
泣へて動もすれば何者の所為ともなれず
父母嘆て上人の名号を
唱へのみ居をもしし
多守りしてもれど件の中ぬ更室
三年乃ち相州大山へ詣り糟谷へ

一里ばかりにて日くれ泄水しるに上人はなはだ上
二丈ばかりたかく二筋乃光りて闇夜をてらせし
ゆへ驛乃入口は樓木にて樓ぬる良乃うて、
大山はるかに飛ぶ事うつ始め信別にて歩居をたれ
ども蕃にて乃るあ民家へ出てもやすしに
踏ゝ村人二三輩沈居るが夜半ゝ窓乃
あふいとおいれよ遠声乃ゝ初乃居ぬ友ゝの
来り戯れるゝ物が何ゝ物すごく
しうば戸乃隙ゝ窺ゝ裸形ゝ男三人、

れを涙ゝ立て君ゝ事ゝ念佛し
事きゝ法ゝ也ぬ上人暁ゝ村人ゝ
て語りしあれとれいとれ赤の屠者の区魂也佛
菩薩ゝ嫌ゝ面ゝ入りもて只ゝ血脉を
涙ゝ乃不便ゝて血脉三色相ゝ赤に
ゝ事よりて遣ゝ乃きし
ゝ村人稼多村ゝゆきて
ゝ弱りれて言葉ゝ川流の馬ゝ
て兩人ゝ出て弱れゝ炭ゝ
件乃ゝ事ゝ述血脉ゝ
裸身ゝ

まうしるの不思議ありて合て皈しやのあ
村人の為ゝ女人まうし貴き血脉なるもまうして
苦患とはうをはりぬと告ゝとゝ靈合山より
十二里隔し東下と云て絲助をまづ賜
て全しき者上人へ詣で教化て達べき便りなく
して只うの為ゝかゝるとて日山を求
と伐るが何ゝなく頻に祈むして斧を枕として
臥れて上人血脉をもまうしあが志
いと妙なるのゝうれしと驚て宣てはり
夢さめぬ絲助はりまうしるまゝおりしく宿
に帰りあゝこれより拜しまうんして垢離を
うり取るの人村者まうし昨日夷合山へ詣り
しに上人机て倚志しほどろ詣せあが村ふ
絲助とゝ貧人ゝやと問せれ者に志を
授んたしゝ届ゝ修まして血脉を
もちて絲助と庵室の下ゝ云ゝ
乃大蛇ほし参詣のゝ怖ゝして知るを
免しまうぞしの人ゝ付ゝ上人の膝を

枕こして卧居たりける間ハ秋
墓所を通るに人見へず男女ともに老若は
そまつなりしが長一尺ばかりなる幼稚なるものは
それぞれにて所しとに貞享元年正月に梵網經
を演らせ二月二日に講おはりて三日ハ紫門を
固く閉参詣の人ともに沐浴剃髪して威
儀ことに正くして佛ぬしに端坐して弟子帰心
して只今往生なりと告高音に念佛一回向乃
倡を唱へたりて帰心して十念をさげ息絶
ぬひぬ村人うかがひて八幡院壽唱に行て告
られて壽唱はどろき走て来て壽唱にて所しが
御臨終にてそなひしや御臨終にてひまなるの
乃かのはちまて位をかけふ上人ともに眼を
ひらき前に来れて十念を三声授け
て合掌して定印をむすびて寂をとりぬ
そなひぬ春秋卒九歳なり
順西身を責香烟佛を現ず
常州江戸崎大念寺にたちき所にて順西と

法師ハ生きつき寇て西をうるまれふて人情を
飾しるうてハ為くるもるうし平生世れ
かぐうと起て念佛と勇猛てはたらしし
起げるおう鴉れ鳴はるまばえがう多をせ先
て曰く沙門れ多としてかるまて霖て大切の勤
行と怠しるれ不届よ是て依て今日ハ食す
と行ゑんとて墨日やて砂食しまう莫日他
出れ時ハるるん扇子二本をし一本ハ清淨
扇して礼佛乃時ちでハ用ひず又いるぐのの

雨雪れけるも蓑笠かくて歩きし人詠まて
問ハはきハるれ天ちう濡てよりれでをを雪
と降ちるる照してよりれハを晴さるふ
もるを私れ弟子とれ蓑笠をるてちこるハ
大るる僻すふく仕しして一ぐうに陥て淫乗
せしちう亡身の炎天ちはるく笠ぐげう
しを回しる新ちう幸迎れ法人とすめて丈亡れ
孫陀羅を造立して常香を薫るにそれ御
る陳ちういいるる香湘ほうかるて自

然て泓陀尊影出来はせたまふ又程ちかき金井の
とかの村乃百姓の家に通夜念佛せしに
襖障子に忽然と丈六の尊影あらはれきせおはし
て人々乃ぞかの頃西ゝ方乃耳に微に聲て
良久して頻り鳴しとなきかの
物はなるしを見しに小き卧形の佛像ゝ
似る舍利にてありき

三海上人雷を祈る雷を鎮す

下総本栗橋行念寺の開山三海上人ハ木食に
竹林の中に三年ゐる起立の行をなさる湯殿山に
年詣でしていとしき高徳にてありき下野の
王生乃邑三年ゝ旱して雨人甚さしき
しゐる所上人を招き雨のいのりを請に祇祈
るゝハいなる旱魃るゝも雨降ずゝるなし
と宣ひしと妬しく思ふ僧多かりし上人七日
乃食し丹心を抽でゝ第七日ゝ雨
うるおれるもしもうしばかの妬僧ども
傘とりて木履をきいさと来りてゝに

晴晴しく吹き来れば俄に晴天して
黒雲おこり雨車軸を流しぬれ渡れば
ぬれて飯りある又幸手の沃野
神を鎮しまひ社を造営はじまりぬ
しかハ幅ひろしと云屋ゆ年こゆ盗
人ハ捕れて上へ引ゆくハやそ
地を復すべし若きゆハ雷れ祟りに会ん
ぬるかぐすもたをくまもちし
うば姥おもひ出ぬ行きしてたちち

雷電庄屋ゆ家ゆ鳴ゆくこの七日七夜迄
庄屋十方ゆくて身をぐき嘆きかこしそ一向
ゆたのゆ先非を悔しうバ山上ハて祈り飯れ
ゆゆ

父誦経娘咏歌

遠州中泉より一里ゆ南畠村乃染屋
ハ三年有余ゆ病れ阿弥陀経を讀誦して
日夜おこゆのゆ砂を以て敷をゆる
修練の後ハ睡眠の間も居れ動く

る山ごもりし黄檗山先住獨湛和尚初山に開居
しいほせしは什人を記捌乃変定西方往生の
人なるをゆるしたふ家乃秋いたりしの
おしもるて秋ハ必ず往生するて床より登り
安坐し暴絶して逝きぬ法名を大合と
号す生前誦經乃數千万巻也ここうや二男二女
乃おの〳〵抜羣して智慧能乃し第四の娘
たを教へしるし初稚乃はより佛菩薩を崇
敬し妙法華經とよみより又和歌を好より大内の

所内三位惟常はしめし称美し給ふとうや
亡父乃追善乃
ゆゑを生て高ふ小ふのまをしんをしてしるの合戦
武士姓を重んす
水戸乃家臣中山伯おるけ臣者に扇谷八郎和
人なるしの乃乃刀を人不易目に当て
強て留れるす三四度なるしかと承引
せしるに自らの刀を負しる金十兵衛初めの
せんとて乃しるで たるし命ハ矢ふも出るを

きゐと辞しまうでゝ人立板基しくて閉
門せらるゝてゝ心やすき侍女ゝひゝかゝ
すでに粗増いまゝ故ゆゝんと詞とちうひく
たるまゝなれど左右ゝが流ゝん自ハ上杉憲政
れ嫡孫にてさの刀ハ代指ゝ扇谷乃
姓号ハ稼金ゝ假領ゝ在名ゝとゝ
くゝひゝけすゝ人もひをかゝゆゝ自ひて
ゝ儀とゝひゝ事ゝ細と問ゝ自人ゝも
頭とちぎゝゝず迄き宰相云きにしゝ

て公案を下置ゝ置ゝ問ゝ
らゝゝ此の迄ゝてゝゝれど公案ゝ乃
辞退ゝもゝく立ちにゝ変細ゝゝ作しゝん
宰相云も對望ゝゝゝ遂ゝて出ゝ作ゝ
ゝ傾此の内ゝ在宅ゝゝゝよゝて侍下迄き
ゝまして二百石ゝ取ゝしゝん

起響松ゝ植性ゝ喧く鳴を咒す

大坂谷町ゝ八町目願生寺起響ハ強ゝ乃
念仏の等師ゝ等本ハ家居にてゝゝ

三間四面のつぶき乃一字くゝりもしと今ハ仏殿
方丈庫裡まて悉く成辯してありこの修営乃
てゝ〻〻〻〻根ゑきをれを二莖門境ゝ植えし
寺門繁栄セハきの松盛長すべしと自祝セられ
しゆ果して鬱茂して今大木ゝなれり又塩所ゆ
閑居の養と占ひ亀ひしてゝ庭れ池中に蛙群
鳴て宣しゝゝ寺れゝで十念をさゞめて停止せり
しゆ生涯のうちハ安て鳴ける元禄九年
八月十七日十二条ゝゝ預め滅後の葬式を営こ

とゆひしゝゝは七日ゝゝる日より南無阿弥陀佛
以毎ゝ云と初めてして常人れ言話にかゝひ仕し
又ゝる人屋しきを買求めあるけれ表に御家
ゝ首ゝ〻〻〻足ゝ胴半ゝし結れ夫新矣
瓶のゝれ〻ゝゝが居てゝ閑唱上人の帛と
ゝゝ〻〻〻もしけるゝゝゝ山家へ移しゝ
ゝゝゝゝゝゝゝさゆゆ墨日上人とゝ法名と
ゝ事移しゝゝ仏のけゝゝもゝゝし後ゝ屋敷
乃来由ときしゝゝ罪人となしゝる場所にて

ものしるべきはかなき人の窮子二人聞てやがて
障りなく門外に出て性しきるべきなりけり
如形初禊しまれど更てひとりなりし親悲
しみて上人に許てありしかくかくなりしかば
祖父母に戒名はと問せるに更て笑ひ給ひ
答へしらはひとりよ祖父母中有に迷ひしかば
仏の家に戒名なきゆえ入り吊を請る便り
なりしかの両人は祖父母にて真似するに
て戒名を与へしかば教へしに信ぜ
ずあ義に入り宮鳥に伺ひ占
らる者に笑ひ嫌らる女十余人陪仕しれば
誹謗とかしりるとなりしに法論の席に
出しゆえ仕るの罪とをなしむ
るの人秘密にて急きけれと立退べし
なしに海上にはに波立て暴風すき
海に入る者を拾ひ獨の人と肝をひやすもの
ども容たちまち飽敢なりて是
雲くいくく波底に入ハ海底に天女に成ける

童子とはなりて経仕へ給ふの時初て
きしとうをきき後一千日まで念仏を修し
八百日もつとめるうち数鴉乃社人たまゆき数人
一様に夢の昔にて残るこの二百日ハ社内にて
はつきりと現に見えたる夜度々にて
しのバれて念仏を社内にて
はつきりと又百五十日過ぎ和尚なりたまへ霊
差れ出でく御回向日にて供養すると
ゆしうば遠出にて道俗老女乃ものまし

ゆの日日中にて群集者に高く十念授
ゆて大往生をとげ紫雲西方に靉靆
天華妙香微妙なる地老少男女庚申
ゆへを待骨をしろい取て結縁ゆへ待ゆる
に俄に潮さるぎて来て一点の餘灰もなく
皆海中に流れ竜神社供
養せしるゆへ松原へ祀貴

伊豆郎往法師

伊豆郎往法師ハ勢州の産也長く名を

乞丐とやしきいひ乞はるる体をはぢず
真鶴は乞丐基左ろとくるまの船頭くらはせ
浦とおもひて世をおくるる二十人の内の
風雨しすでに私を破却せしと体ろうべ
ひるる幸き命を免まぬ内ひをかるるしい
内の多の養んしかるほいせる業をするの
ほとに拙きんるるるばや今ろして緩ひ立取て
飢渇斬害ひるふもさのあれるとハ心ぬ
ゆびきし自誓を立ちる念仏門入偏
西方を拝びし鵠ら岩屋して浦辺おくはの
波ろのしらば人の口ひもらき取を見立て星を
寇竟乃道場ろと一椀の飯をもらでうぬ
甚たつハかくさるでなる命をいぶらへもしと
取りあしかどはるるもうきばりしらばいるる
海底は藻ふもやとて五体のうにのなるひ
祝須て後鵠乃者は吉頃岩屋へ
口ひれうとのあるしゆいぶくて弱しも
ひる人たりてかぶりに念仏しるひ角も貴く

て里人ども食物くこびくさしてせおはぬ
念仏乃こと絶る事なしとて亡き後二千
日回向とはもあらんかと毎夜竜燈三つ四つ
しうばかりて夜こしきりにて後人怪
とおもいてもあれ小田原はまへ訴へ出しを
小田原より二三里をへて松田の浄願寺にて禅寺
惠心乃作れ弥陀尊乃
つをハ鵠ら岩屋即往が許へゆくと告ぶ
數度ていねんびくばきて檀那面く

ていかとバ又ゑれ人も件れ出家志ゆう
そ頂ていかのをとたらひ如来を贈り奉りしゐ
永弘久文字と云ふ雑夢ありと云ふ人
ていい人笑をしるる先詳ていかとはあり
安置しまり世とき始て如来ハ名ゑ出しそ
即往とまじまり三年ゑ案れとき不品岩屋を出て
赤澤れ後巳ふ四いうる庵をむすび初念仏
いつまあび念仏しまり村人兼てきてたびび尊き
大法師とて日こ食ぬたらぬ岩屋れ本ゑるびゑ

佛具ホハ後人の為ひとしてほとり近き浄土寺の
西念寺にうつしたてまつりしに其時素伝法平井とくに
熊野權現宮に参詣し本地阿弥陀佛を尊く
おもひ奉りに里人ゆめに告申すやう黙止
がたくて法師御徒の輩いせ参ふのうつくき
抹香とともに火をたきて内に参れ給ふ地獄
おそれずと心ゆるしたまへ此山
を取りて足をもて鞭打たれ
玉は管にうつして観音の霊像はいとあらず法師是

もてきたりと思ひて起きるに翌朝一人の御門主
私に俗縁の使僧也昨夜の地獄やと宣ひて
ちらせたまふ又ある時何者ともしれず合
乃借物をせんとて物語りしを何人なく来たて
祖師をしきりに悪く舎利をとりて伊豆
相模の弘窓乃言僧ともく詩ひて法論
しるしいちにいたまも舌をあるひく飯れ元禄
十年に箱根塔峯の融雑上人ゆりて念仏の
秘を授て法の功入今日二月日ほどお勤

云し故齡を考へしに少有餘なるべしかも
面相なりし此後一年過ていと
貴く往生せしとも也

山崎宗鑑

宗鑑法師は近江源氏佐々木氏一族也志那
谷の範重といひし近江の比古角右衛門甲賀山
の麓に居し人也将軍義尚公軍勢を引率し
地蔵鉤里に陣中にて歿しあり時範重は
供奉せしが山内にて俗世はなれ悟て
頓て髻を切り武門を出揺州尼ヶ崎に閑居せり
後に山崎卿に置て蓬窓の中に風月を弄び
滑稽にして富り筆取は一流の祖なり唐土に
人を踏て者て瑠璃に金仏を置るがごとく
譬しとも尤なり油瓶を鬻て世にする業とし
朝夕事にては鳥目十銭にてもごとくなりしとも也
室には茶櫃一つより外は富る地なく額に掛られし
上宮主俗の中宮日吟下宮海道記書

戯僧遺書

泉州境の真言宗の僧あり酒を嗜て婚しも辞
れ緩なるくて已戯を言のみて世をくらす
然れ共泊然としいさぎよくして初稿今でかきしで人と
紫をし此僧身病うて後遺封をしきこるを寺
と書籍とハ螺の貝をくる金三百両ハ多の履取に
得さす出家ハ財宝ハ福の基也衣服ハ垢れ
ゆくへよ辞世
世の中ハさのくを夜てんくでらの僧たちの私儀
木村長門最期雪操

大坂の城今を限りあるとし此ハ木村長門守風呂に入り
髪をなくしひくく伽羅を焚せ江口の曲舞紅葉
はをはの朝くを詩ひ餘念なく小鼓をうきくをとれ
次の日花やうるる討死をきくを印を大将軍
家康公汗流をて涙流ををひ此若者討死を極め
髪ハ香ををるくを月代を剃ばしと偽られ
とうやを時髪をすき香を焼くを女ハ化を少て木原
意運をを和の伯母をなりし老後をて常に
かくをを

不破万作戀情

開白秀次公侍臣従不破万作なゝ容顔
艶麗なりてたゞしき一度の笑ひ百れ媚なりと
いふこゝろおのゝ内ゝ思ひくらべん殿下伏見の法楽なる
連歌にこそ供奉しなるいぶるすハなかりきそなふ時
なる武士威儀とそなくゝ源氏物語なて万作なをなる
てもし拍子なるゝん能ふくれてなもすゝびくて
おなじくハ万作なをなりぎふ忍ぶ者代なる者とめし
なりしなるゝなる者なりしなれゆへなるんなもりて

なまいれくなりしなば堂なの上落なて件なる者を移ぶるに
見所多端なる追従なるぎなる賑なる家ふしなるぬ業
問しなるそなる言葉しなるなるの者思ひなるぶるの
なるなるぬ作なる物なるで推なる問しなる実ふなる
なるなるなるなる侍なるしなる涙袖なるぶなるなるなるハなる
なるなるみなるん自らハ要なる乃何氏なる仕へなる鄙き武士に
なる侍なるしなる責なる法華なる経なる聞なるなるなるなるを
殿下なる物なる階なる作なるなる忌なるれの殿なる入なるなるあなるなるせ
なるなるなるなるなるなる夢現なるもなるなるなるなるなるなるなるなる

ちかてふ法教ちかとも又法師とさうしは思せこうし
ようとて四もちかくをんなにはいかなるとかくさて憂日過
たうはしとうかくかうで申しすて妻御て
万作殿へ告はしたる万作殿恵信の石隔ちく法石に
はりはるかおはかされりん平野のた物はりとはちなど
こを東谷間は橋ちくに様とへ出とし法ん子ちに玉章
法ちくめるてみかのさとへはちはりにかの者拝し
又ちうるはりさ貴さ骨ふ遠り一夜せ千夜もはち
はびしに頃の日法物万しの主て殿下出法はりせ

万作殿も例ちはかはふ供奉しきを思い晩ふれうしび
還御はは万作殿俄て腹はいはせて石山寺はは房
かせ針灸もしはけとうはしさちちはいぎは法
祇園の献物として典業かをこうをおはへ盃数献て及
なのはいはは碎ふて万作殿はかはての粗増せて
法文と伺い竊て聞を忍出て縁田乃橋て好を
かの者薄を被て欄干て倚居ちに間ちくはせ
いと法やはは情あはせちはは殿下てハ法験はしを
法近信は上田主水正はは法作万作見ちいはは

ばちん居けるものの上にて芳田の橋ふるを
飛せ来りて怪しや蘭奢待れ落しぬ山香木ハ
外人の手に帰するのなるいとおしい結構の万作及て曲
ばちんとなりし数十丈を走者を路下めとし唯一瞬を
薫て陸しいとふ身へ欄干れ外に人影ふれハ
主水正たちまち呼ていくくもなるハ万作及ちん
高き水面上に使て函いとふ曲ばちんと変へ
作し法ハいとふしくやへて直ち馬を海へ
し万作及ばちの志れ行ふく感しいく

ようて笑しお君れ出いくばちんえれ慰ちと
ト肌れ白小袖と興へ石山ちかくなしぬかの者注前
れ年寄今を海足ちもや活て何ちせんて脇十
文字ちかきゆり身を蒼浦ち志川ちかぎやち
ア髏水上ち流も志賀ればちにつきしば浦人
出ばし異ちる薫しちるとて件れ戸髏をひきばちる
年壮ちる男れ大ち袖れ白忍著ちるをしぶとて
ちるくちりてやちるいるち万作及きこしめ
急き注者ち作せつちかれ戸髏を弘ねるを志笑れ

里寺にて葬らせたまひぬ後文禄元年に秀吉公秀吉公と不和にて高野山に遂らるゝ併秀信は高野山に死出の供せんとて墨染
にやつれおはしますを世人哀れとなく中也
の上意なりしかばなのくに黙しあるに万作すこし
はくるるく上意にはせんとてはかりごとを
言上しあまつさへ恩君は法服をそめ給へるこをも
なるとて涙にむせび咽びあれど殿下も出給へくも
なり給ひの若房は涙ぬぐひて妻細を少作り